

## 教員紹介

石井 仁 教授	専門分野：東洋史
研究内容	<p>1. 漢六朝時代の制度史研究。第一に、後漢から三国にかけての政治・軍事制度の変質過程を、当該時期の在地勢力や非漢民族の活動、および、かれらが抛った自衛自治集落(村場)などとも関連させつつ、研究している。第二に、礼儀制度、とくに重臣に賜与される特別の恩典(殊礼)を手がかりに、当該時期における皇帝権力の在り方について考察を進めている。</p> <p>2. 三国時代史の研究。これまで小説『三国志演義』の影響下、誤解・曲解されることの多かった当該時期の史実や人物像について、歴史学の立場から再検討している。</p>
研究業績	<p>1. 『曹操－魏の武帝』(単著) 新人物往来社、2000年、増補・文庫版、2010年</p> <p>2. 「虎賁班劍考－漢六朝の恩賜・殊礼と故事」『東洋史研究』第59巻第4号、2001年</p> <p>3. 「渭河流域における村場の基礎的研究」飯島武次編『中国渭河流域の西周遺跡』同成社、2009年</p> <p>4. 「参軍事の研究」『三国志研究』第10号、2015年</p> <p>5. 「汪兆銘から東條英機に贈られた出師表の拓本」『駒沢史学』第91号、2018年</p>
大城 道則 教授	専門分野：古代エジプト史
研究内容	<p>1. 古代エジプト第三中間期とそれ以降における異文化の流入とその受容のプロセスを明らかにし、当時のエジプト社会の実態の解明を目指す。</p> <p>2. 古代エジプト文明の象徴であるピラミッドの持つ意味とそれらが建設された理由、そして建設方法などについて、ピラミッドが出現する以前の時期から造られなくなる時期までを視野に入れ、埋葬形態の変遷や社会状況の変容から検討する。</p> <p>3. 古代エジプト文明の形成過程のなかで、人々によって岩壁画や考古遺物上に描かれてきた原始絵画の持つ意味とそれらが後世の文化発展に与えた影響について明らかにする。</p>
研究業績	<p>1. 『古代エジプト文明－世界史の源流－』、講談社、2012年</p> <p>2. 『ツタンカーメン－「悲劇の少年王」の知られざる実像－』中央公論社、2013年</p> <p>3. 『図説ピラミッドの歴史』河出書房新社、2014年</p> <p>4. 『古代エジプト 死者からの声－ナイルに培われたその死生観－』河出書房新社、2015年</p> <p>5. "Pyramids and Muography: The Development and the Aseismic Structure of Pyramid", in H. Miyamoto et.al (eds.), <i>Muography: Perspective Drawing in the 21st Century</i>, The University Museum, The University Tokyo 2015</p>
角道 亮介 准教授	専門分野：中国考古学
研究内容	<p>中国の初期王朝時代(紀元前二千年紀～前一千紀前半)の政治的な実体とその成立過程を究明することを目的に、中国殷周時代の青銅礼器(彝器)の型式と分布への検討を通じて、中央による支配の正当性や周辺地域での受容のあり方を物質文化から読み解く。さらに、いわゆる「中華文明」がいつ、どのような独自性ととも成立したかについて考古学的な検討を行う。対象とする地域は主に黄河流域の諸文化であり、青銅礼器の製作技術や銘文内容、紋様の意味などにも注目しながら、初期王朝において青銅器が果たした特殊な役割を再評価したい。</p>
研究業績	<p>1. 『西周王朝とその青銅器』六一書房、339頁、2014年</p> <p>2. 「西周時代晋国墓地の研究－晋国青銅器を中心として」、『中国考古学』第7号、143-166頁、2007年</p> <p>3. 「西周時代関中平原における青銅彝器分布の変化」、『中国考古学』第10号、85-116頁、2010年</p> <p>4. 「西周青銅器銘文の広がり」、『中国考古学』第12号、35-59頁、2012年</p> <p>5. 「西周青銅器銘文からみた祭祀行為の変容」、『中国出土資料研究』第20号、38-67頁、2016年</p> <p>6. 「考古資料からみた龍の起源」、早稲田大学中国古籍文化研究所編『中国古籍文化研究』上、447-460頁、東方書店、2018年</p>
熊本 史雄 教授	専門分野：日本史
研究内容	<p>日本近代外交史、とくに戦間期(1920～30年代)において日本が展開した「新外交」としての対外政策につき、「史科学的アプローチ」を用いながら外務省における組織的対応の実態を明らかにすることを主に研究している。</p> <p>戦間期の外交史研究は、これまで「ワシントン体制」論、幣原・田中外交、政軍関係などを分析視角として蓄積が進んできた。しかしながら「外務省自体の組織学的分析」については未だ解明されていない。「外務省記録」を構造的に読み解いてこなかったことが要因に挙げられよう。こうした課題を克服すべく、「史科学的アプローチ」による外務省の組織的対応の実態に関する分析を基に、当該期日本外交の実態を解明するよう努めている。さらに近年は、外交官・幣原喜重郎(しではら・きじゅうろう、1872-1951)の伝記研究にも取り組んでいる。</p>
研究業績	<p>1. 『大戦間期の対中国文化外交－外務省記録にみる政策決定過程－』吉川弘文館、2013年</p> <p>2. 『近代日本公文書管理制度史料集 中央行政機関編』(共編著)、岩田書院、2009年</p> <p>3. 『伊藤博文文書 秘書類纂 外交 1～14』(第114巻～第127巻)(編集・解題)、ゆまに書房、2014年、2015年</p> <p>4. 「大戦間期外務省の情報管理と意思決定」(『日本史研究』第653号)2017年</p> <p>5. 「戦間期日本外務省における対中外交の組織的対応－亜細亞局設置の外交史的意義」『国際政治』168号、2012年</p> <p>6. 「大戦間期の外務省と対中文化外交」(学位論文、博士(文学)(筑波大学)、2012年)</p>

<b>小泉 雅弘 教授</b>	専門分野：日本史
<b>研究内容</b>	江戸東京に視点を据えることにより、「周辺地域」(地域史)「文化と宗教」(文化史)「江戸の『東京』化」(政治史)の3つを切り口として、維新変革の歴史的意義を研究している。幕末維新期を対象とした研究が、近世史と近代史に二分化しているために、明治維新が未曾有の大変革にもかかわらず、ともすれば明治維新特有の歴史像が不鮮明になってしまっているのが現状だろう。そこで、近世と近代を視野に入れながら維新変革の契機・要因を重視し、江戸東京というフィールドを設定することによって、明治維新の歴史像を立体的・多角的に構築したいと考えている。
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「明治初年東京府の勅・奏任官官員構成」『駒沢史学』第43号、1991年9月</li> <li>2. 「幕末風刺画とその受容層—近代『世論』形成の一前提として—」『駒沢史学』第53号、1999年3月</li> <li>3. 「吉田御師『蒼龍隊』の戊辰戦争」明治維新史学会編『明治維新の文化』吉川弘文館、2005年8月</li> <li>4. 「維新変革と江戸東京」博士(歴史学)学位論文、2006年3月</li> <li>5. 「幕末維新期における中川番所の機能と『国産改所』計画」江戸東京近郊地域史研究会編『地域史・江戸東京』岩田書院、2008年4月</li> </ol>

<b>佐々木 真 教授</b>	専門分野：西洋史
<b>研究内容</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. フランス絶対王政期の軍隊の研究。軍隊と王権の関係や軍隊行政に関して、当時の行政文書を中心に検討を行っている。単なる軍隊制度の研究ではなく、国制史研究の一環として、当時の国制の中に軍隊がどのように位置づけられているのかを検討している。</li> <li>2. フランス絶対王政期の王権の表象。ルイ14世がヴェルサイユに代表される宮廷や各種の記念碑によってどのように表象されているかを研究している。具体的には、芸術作品(絵画や彫刻、建築物)にルイ14世や彼の戦争がどのように描かれているのかを検討している。</li> <li>3. 戦争の歴史。歴史のなかで戦争がどのように認識されているのかを、協同研究プロジェクトを実施して研究している。</li> </ol>
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「ルイ14世期の戦争と芸術—生み出される王権のイメージ」(単著、作品社、2016年)</li> <li>2. 『図説フランスの歴史(増補新版)』(単著、河出書房新社、2016年)</li> <li>3. 『図説 ルイ14世』(単著、河出書房新社、2018年)</li> <li>4. 「近代ヨーロッパの探求 12 軍隊」(共著、ミネルヴァ書房、2009年)</li> <li>5. 『歴史と軍隊—軍事史の新しい地平をめざして』(共著、創元社、2010年)</li> </ol>

<b>高田 良太 准教授</b>	専門分野：西洋史
<b>研究内容</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 中世の東地中海における、ヴェネツィア人と他エスニシティの対立や交流について研究している。具体的には、海外進出したヴェネツィア人と、ギリシア人との関係を政治、社会経済、宗教などの異なる視点から明らかにしようとしている。将来的には、イスラム系諸国家とのヴェネツィアとの関係を明らかにすることにも関心がある。</li> <li>2. 中世のギリシア人のディアスポラについて研究している。ビザンツ帝国は13世紀以降衰退し、知識人や高位聖職者を含む多くのギリシア人が亡命を余儀なくされた。こうしたギリシア人が、西欧における文芸や芸術にいかに関わっていたのかを、14世紀から16世紀までの西欧の各地の文書館史料をもとに跡づけていく。</li> </ol>
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「中世後期クレタにおける教会とコミュニティ」『史林』第89巻第2号、2006年</li> <li>2. 「ビザンツ—交流と共生の千年王国—」昭和堂、2013年(共著)</li> <li>3. 「港湾都市カンディアからみた中世後期の東地中海」『歴史学研究』第911号、2013年</li> <li>4. 「中世クレタにおける見えない「フロンティア」—遺言書からみた都市カンディアの共生社会—」『駒沢史学』第84号、2015年</li> <li>5. 「コミュニケーションから読む中近世ヨーロッパ史—紛争と秩序のタビストリー—」ミネルヴァ書房、2015年(共著)</li> </ol>

<b>瀧音 能之 教授</b>	専門分野：日本古代史
<b>研究内容</b>	古代出雲地域史を研究テーマとしている。出雲の古代史は、単にひとつの地域史ということにとどまらず、日本古代史全体に大きな影響を及ぼすと考えられる。こうした点をふまえて、日本古代史を中央からの視点ではなく、地域からの視座によってとらえ直したいと考えている。また、『出雲国風土記』をはじめとする諸国の『風土記』を基本史料とした説話の研究や出雲神話などの日本神話の研究にも関心を持っている。
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『古代出雲を知る事典』東京堂出版、2010年</li> <li>2. 『出雲古代史論攷』岩田書院、2014年</li> <li>3. 『出雲大社の謎』朝日新聞出版、2014年</li> <li>4. 『風土記から見る日本列島の古代史』平凡社、2018年</li> <li>5. 『風土記と古代の神々』平凡社、2019年</li> </ol>

## 教員紹介

<b>寺前 直人 教授</b>	専門分野：考古学
<b>研究内容</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 日本列島における初期金属器段階（弥生時代）における生産と流通</li> <li>2. 武器と社会構造の関係</li> <li>3. 古墳時代における土器を用いた葬送儀礼の研究</li> <li>4. 横穴式石室の構造と地域性の解明</li> <li>5. 日本列島における弥生・古墳時代における地域文化の展開</li> </ol>
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『武器と弥生社会』大阪大学出版会、2010年。</li> <li>2. 「日本列島における青銅製武器模倣石器の出現過程」『古代文化』第64巻第1号、古代学協会、2012年。</li> <li>3. 「モガリと考古資料」『古墳時代の考古学』3 墳墓構造と葬送祭祀、同成社、2011年。</li> <li>4. 「石器の生産と流通」『講座日本の考古学』第6巻弥生時代（上）、青木書店、2011年。</li> <li>5. New Interpretation of the Stone Replicas in the Russian Maritime province: Re-Evaluation from the perspective of Korean Archaeology. The Review of Korean Studies Volume 12 Number 2 2009</li> </ol>
<b>中野 達哉 教授</b>	専門分野：日本史
<b>研究内容</b>	<p>近世の地域社会について研究している。フィールドとしているのは関東であり、そのなかでもとくに江戸および江戸周辺地域に関心をもっている。</p> <p>研究の視点のひとつは、検地をはじめとする幕藩領主による在地支配の問題である。近世の検地研究は戦後歴史学のなかで小農自立の問題から研究が蓄積され、太閤検地論争に代表されるように中心的な位置を占めたが、近年では停滞している。小農自立の視点からではなく、領主の地域政策として多角的に再検討し、村社会・地域社会を描くことが必要と考えている。</p> <p>もうひとつは、江戸および江戸周辺地域社会の展開の問題である。江戸周辺地域社会については、江戸を支える後背地として位置づけられ、経済的側面や支配体制の問題から分析が進められ、江戸城や江戸と結びついた「江戸周辺農村」として位置づけられている。しかし、人や土地の問題についての研究は少なく、江戸周辺地域社会の形成過程や江戸と江戸周辺地域との人の移動・交流・結合、とくに直接の支配関係にない武家と町人・百姓との関係を中心に、研究を進めている。多様な人々が混在する江戸および江戸周辺地域社会を捉え、その歴史像を描くことが必要と考えている。</p>
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『新編埼玉県史』通史編3近世（1）・4近世（2）、（共著）埼玉県、1988年3月・1989年3月</li> <li>2. 「近世前期中山道板橋宿の名主・問屋役について」『駒沢史学』55号、2000年3月</li> <li>3. 「近世の検地と地域社会」吉川弘文館、2005年2月</li> <li>4. 「弘前藩庁日記と日記役」『国文学研究資料館紀要』アーカイブズ研究篇9号、2013年3月</li> <li>5. 「江戸の武家社会と百姓・町人」岩田書院、2014年2月</li> <li>6. 『鎌倉寺社の近世』（編著）岩田書院、2017年、9月</li> </ol>
<b>中村 淳 教授</b>	専門分野：東洋史
<b>研究内容</b>	<p>モンゴル時代の中央ユーラシア史を研究している。現在は多言語史料を用いつつ、特にアジア東方世界における王権と宗教、チベット命令文の研究を中心に進めている。当該時代・地域における王権と宗教の関係を探り、その実態を明らかにする作業はそれだけにとどまらず、共時的にのみならず通時的にも様々な巨視的歴史像を結び手掛かりを導く。また、チベット命令文の研究は、これまで全く手つかずのまま放置されていた分野であり、モンゴルによるチベット支配の実態、文書行政の一端、チベット仏教尊崇の実態を明らかにしていく際の糸口を提供してくれる。</p>
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「元代大都勅建寺院の寺産——大護国仁王寺を中心として」『駒澤大学文学部紀要』第71号、2013年。</li> <li>2. 「敦煌莫高窟北区第127窟出土チベット語文書断片」『13-14世紀モンゴル史研究』第1号、2016年。</li> <li>3. 「新発見ガンゼ=チベット族自治州档案館所蔵チベット文法旨簡介——モンゴル時代における東チベット史研究の可能性」『13-14世紀モンゴル史研究』第2号、2017年。</li> </ol>
<b>林 讓 教授</b>	専門分野：日本中世史・史料学
<b>研究内容</b>	<p>花押と筆跡の史料学、中世仏教史研究の二つの研究テーマからなる。一遍やその門弟時衆を中心とする中世仏教史の研究から開始したが、前任校の東京大学史料編纂所では、花押・筆跡・荘園絵図などの画像史料・非文字史料に関わる調査・研究・編纂を業務としていたことから、鎌倉幕府初代将軍源頼朝や足利尊氏・直義兄弟以下の室町幕府歴代将軍の文書と花押、武家文書の様式と使用する料紙との関係など、史料の形態論的研究を課題としている。授業では、文献史料を読み解くこと、特に声に出して読む、手で書いて覚えることが重要と考えており、実践したい。具体的には、本学に由縁のある大久保道舟氏編『曹洞宗古文書』所収文書を中心に読み進める。</p>
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「古文書料紙の使用法覚書」、湯山賢一編『古文書料紙論叢』、勉誠出版、2017年</li> <li>2. 「『天文日記』の記号覚書」、東四柳史明編『地域社会の文化と史料』、同成社、2017年</li> <li>3. 「源頼朝第一筆蹟について」、『鎌倉遺文研究』第42号、2009年</li> <li>4. 「禅僧の花押について——宗峰妙超等を中心として——」、広瀬良弘編『禅と地域社会』、吉川弘文館、2009年</li> <li>5. 「源頼朝の花押について——その形体変化と治承・寿永年号の使用をめぐる——」、『東京大学史料編纂所研究紀要』第6号、1996年</li> </ol>